

基礎看護学実習

目 的

これまで学習してきた知識・技術・態度を基盤に、看護実践場面での体験を通して看護とは何かを考え、看護実践に必要な基礎的能力と態度を養う。

目 標

1. 入院患者の生活環境や療養生活の実際を知り、生活を支えるための看護活動及び看護の役割・機能を理解する。
2. 病院の組織・機能と、患者を取り巻く各職種の役割と連携を知る。
3. 看護の対象を身体・心理・社会的側面から理解する。
4. 対象の生活上のニーズを把握し、必要に応じた援助を実践できる。
5. 問題解決思考を用いて、一連の看護過程のプロセスを展開できる。
6. 実習で出会う様々な人々との関わりを通して、対象を尊重する態度を養う。

基礎看護学実習 I

(生活環境の理解と基本技術の適用)

目 的

患者を取り巻く環境と看護の役割を理解し、患者に合わせて適用させた看護の基本技術を実践できる。

目 標

<基礎看護学実習 I - 1>

1. 病院の概要と各職種連携を知る。
2. 利用者の視点から病院・病棟・病室環境を知る。
3. 患者に行われている看護援助を知り、看護師としての態度や基本姿勢を考えられる。

<基礎看護学実習 I - 2>

1. 患者の療養生活と日常生活について理解し、状態を考慮した日常生活援助が実践できる。
2. 自己の行った看護行為を振り返り、日常生活援助技術の適用の妥当性を評価できる。
3. 患者－看護師間の相互作用の重要性を理解できる。
4. 看護チームの一員として自己の役割を学び、看護学生として責任をもって行動できる。

<基礎看護学実習 I - 1 >

内 容

1. 病院の構造・設備とその機能、目的、各職種の役割と患者サービスを把握する。
 - 1) 病院の理念及び看護部の理念
 - 2) 病院で働く職種の役割と連携
 - 3) 地域との関連や病院がもつ役割
 - 4) 施設の防災・安全対策
 - 5) 施設利用者にわかりやすい表示や各部門や設備の構造上の位置関係
2. 病棟・病室の構造・設備とその機能、目的を把握する。
3. 生活環境としての病棟・病室の温度・湿度・空気・音・光・臭い、プライバシー、安全への配慮の重要性を把握する。
4. 病棟における看護活動の内容・目的・方法を学習する。
 - 1) 直接的看護活動
 - (1) 日常生活援助 (2) 診療に伴う援助 (3) 患者指導
 - (4) 心理的援助
 - 2) 保健医療チーム活動の仲介、調整
 - (1) 看護チーム活動 (2) 看護者間・他部門との連携 (3) 記録・報告
 - 3) 患者への配慮の仕方
 - (1) 説明・同意の確認
 - (2) 患者のおかれている状況を確認した上での実践
 - 4) 看護過程の実践
5. 援助場面やコミュニケーションを通して患者の思いを捉える。
6. 指導者の看護活動を見学し、説明を受ける。
 - 1) 病室の環境を整えるための援助
 - (1) 病室の環境整備 (2) 病床の整備
 - 2) 衣・清潔の保持のための援助
 - (1) 部分清拭 (2) 入浴の介助 (3) 足・手浴 (4) 整容
 - (5) 洗髪 (6) 口腔ケア (7) 寝衣交換
 - 3) 食生活への援助
 - (1) 食事の環境づくり (2) 食事の介助
 - 4) 移動に関する援助
 - (1) 体位変換 (2) 車椅子・輸送車による移送 (3) 歩行介助

方 法

<学内実習>

ねらい：実習の目的・目標・内容・方法を理解し、実習の準備性を高める。

1. 実習前オリエンテーションを受ける。

<病院>

(1日目)

1. 病院の構造・設備の機能と目的、各職種の役割と患者サービスを把握する。
2. 以下の部署について見学、説明を受ける。

1) 医療関連

総合案内、事務部門、地域医療連携総合センター、医療相談室、病歴室、外来部門（各診療科、中央採血室）、勤労者医療総合センター（治療就労両立支援部、労災疾病研究部、働く女性のための外来など）、リハビリセンター、薬剤部、放射線部、臨床工学部、中央検査室、中央手術室、中央材料室、血液浄化センター、化学療法センター、栄養管理室、薬剤部、放射線部、など

2) 入院生活関連

空調機械室、ボイラー室、ゴミ仕分け室、洗濯室、売店、レストラン、浴室、コインランドリーなど

3) その他

電気室、発電機室、防災センター、ヘリポート、霊安室など

3. 1日目の実習終了後、「病院について学んだこと」というテーマで、以下の項目ごとと利用者の視点で共通レポート用紙に学びを整理する。

- 1) 医療を提供する部門・職種、連携について（地域との連携も含む）
- 2) 入院生活を支える部門・職種
- 3) その他学んだこと

(2日目)

1. 45分から1時間程度で、教員と以下の病棟、病室の構造・設備・機能について可能な限り見学し、患者の視点でプライバシー、安全への配慮について考える。
 - ▶ 病棟：トイレ（身障者用を含む）、浴室、洗面所、清拭室、浴室、汚物室
 - ▶ 病室（4床室、個室）：ベッド、ベッド柵、ナースコール、各種センサー、カーテン、テレビ、床頭台、オーバーベッドテーブル
2. 指導者の説明を受けながら看護活動を見学し、活動内容・目的・患者の状態を考慮した方法について考える。
3. 指導者と患者のコミュニケーション場面を意図的に観察する。
4. 実習終了後、行動記録を記載する。
5. 実習終了後、「看護にとって大切なこと」というテーマで、実習で学んだことを共通レポート用紙に2日間の実習での学びを記載する。

＜基礎看護学実習 I - 2＞

内 容

1. 患者の情報を、コミュニケーション、記録物、観察などから得て、援助の必要性を考える。
2. 患者の生活過程を考慮した日常生活の援助技術を実施する。
 - 1) 病室の環境
 - (1) 病室の環境整備 (2) 病床の整備
 - 2) 清潔・衣生活
 - (1) 全身・部分清拭 (2) 入浴・シャワー浴の介助 (3) 部分浴の介助
 - (4) 整容 (5) 洗髪 (6) 口腔ケア (7) 寝衣交換
 - 3) 食生活
 - (1) 食事の環境づくり (2) 食事の介助
 - 4) 排泄
 - (1) 床上・室内・トイレでの援助 (2) おむつ交換
 - 5) 活動・休息
 - (1) 体位変換 (2) 車椅子・輸送車による移送 (3) 歩行介助
3. 患者に行った援助、援助に対する患者の反応、自己の行動について評価する
4. 評価したことを次回の援助に活かす。
5. 患者との関わりを振り返る。
6. 看護におけるコミュニケーションの機能と方法を理解する。
 - 1) 患者との会話
 - 2) 行動・態度・表情の観察、解釈
 - 3) 話の内容の正確な受け止めと表出
 - 4) 必要時、意味の確認、場と時間の工夫、聞く姿勢の工夫
7. 看護チーム内での報告・連絡・相談がどのように行われているのかを学ぶ。
8. 看護者・看護学生としての必要なモラルとは何かを学ぶ。

方 法

＜学内実習＞

ねらい：実習の目的・方法・内容を理解し、事例を通して援助計画を立案できる。

1. 実習オリエンテーションをうける。
2. 紙上事例を用いて援助計画を立案する。

＜病棟＞

1. 受け持ち患者1名を受け持つ。

《対象の目安》1) 言語的コミュニケーションが可能であること
2) 内容の2-1)～5)のいずれかの援助を受けていること
2. 病棟オリエンテーションを受ける。
3. 患者の日常生活に関する情報を意図的に収集し、情報から援助の必要性を判断して援助計画を立案する。
4. 行動計画や援助計画に基づいて行動し、指導者に実施した内容やその判断等について報告する。
5. 1場面について、プロセスレコードを記載する。
6. 「患者の状態を考慮した日常生活援助を実践して学んだこと」というテーマで、病棟でカンファレンスを開催する。
7. 実習終了後、実習体験をもとに、「看護に対する自己の考え」を共通レポート用紙に記載する。

基礎看護学実習Ⅱ

(看護過程の展開)

目的

対象への援助を理論的・科学的に考える看護過程の基礎を学ぶ。

目標

1. 対象の特徴を踏まえ、看護問題を解決するために計画を立案・実施し、その評価をすることができる。
2. 看護チームの一員として、連携して看護活動を行っていく上で調整の必要性和報告のあり方を学ぶ。
3. 看護についての考え方を表現できる。

内容

- 目標1-1) 対象の環境を理解するために、病棟の特性・看護の特徴を把握する。
(病棟の構造・看護方式・日課・病棟の週間予定など)
- 2) 受け持ち患者との信頼関係をつくる。
 - 3) ヘンダーソンの看護論を用いて看護過程を学習する。

(1) アセスメント

①情報収集

- ・ 基本的看護の構成要素
- ・ 基本的欲求に影響を及ぼす常在条件
- ・ 基本的欲求を変容させる病理的状态

②情報の分析・解釈

- ・ 基本的欲求を充足した状態から未充足の状態を判断する
- ・ 充足していない欲求と常在条件・病理的状态との関連づけ
- ・ 充足していない原因・誘因を体力・意思力・知識の面から判断する

(2) 看護問題の明確化

未充足な状態と未充足を引き起こす原因・誘因の特定

(3) 計画立案

自立に向けて基本的欲求を充足するために必要な目標と援助方法を決定する

- ・ 体力・意思力・知識がどれだけ高められるか判断し設定する
- ・ その人の生活様式を尊重して援助方法を選択する

(4) 実施

自立に向けてその人の基本的欲求を充足するための行動をとる

- ・身体的ケア（安楽を与える）
- ・心の支え（保護する、見守る）
- ・再教育（教える、導く）
- ・治療計画との調整

(5) 評価

対象がどのくらい速やかに、あるいはどの程度までに日常の行動の自由を取り戻したかを、その人の行動の変容と評価基準とを比較して問題の予防・緩和・解決の状況を判断する。

- 4) 報告は簡潔明瞭・正確に行う。
- 目標 2 - 1) 看護はチームワークで運営されていることを理解する。
2) プライバシーを保護する。
3) 言葉づかいは丁寧で、他者を尊重した態度で接する。
4) 自分の実施した援助などを発表し、チームからの助言や評価を受ける。
- 目標 3 - 1) ヘンダーソンの看護論に基づく看護の目的と実践を関連づけ考察する。
2) 対象に接したり、看護実践を通して自己の看護に対する見方、考え方を整理する。

方 法

<学内実習>

ねらい：初めて実践の場で看護過程を展開する前に、看護計画の実施・評価・修正のプロセスを体験する。

1. 病棟実習前、実習グループごとに行う。
2. 内容
 - 1) 実習前オリエンテーションを受ける。
 - 2) 紙上事例を用いて立案した看護計画の、実践・評価を行う。

<病棟>

1. 病棟オリエンテーションを受ける。
2. 言語的コミュニケーションに支障のない1名の患者を受けもつ。
3. 立案した看護計画に基づいて看護を実践する。
4. 1場面について、プロセスレコードを記載する。
5. 「看護過程を用いた看護実践から学んだこと」というテーマでカンファレンスを開催する。
6. 15:15～16:00は、学内にてカンファレンスや指導を受ける時間とする。
7. 実習終了後、実習体験をもとに「看護に対する自己の考え」を共通レポート用紙に記載する。